

長野県松本市

NAKAYAMA-KOHUN-GUN

中山古墳群

KUWAGATAHARA-ISEKI

鍬形原遺跡

HUDOUZAWA-KOYOUSI

不動沢古窯址

—中山霊園拡張に伴う第 X ～ XIII次発掘調査報告書—

2005

松本市教育委員会

長野県松本市

NAKAYAMA-KOHUN-GUN

中山古墳群

KUWAGATAHARA-ISEKI

鍬形原遺跡

HUDOUZAWA-KOYOUSI

不動沢古窯址

—中山霊園拡張に伴う第 X ～ XIII次発掘調査報告書—

2005

松本市教育委員会

例言

- 1 本書は、松本市中山字鋤形原 4905 番他に所在する中山古墳群、鋤形原遺跡、不動沢窯跡、及び鋤形原砦址の緊急発掘調査報告書（全 3 冊）のうち、第 X～XIII 次調査分（平成 11～13 年度）を扱った第 3 分冊である。（第 1 分冊：松本市文化財調査報告 No.168 第 2 分冊：No.175）
- 2 本調査は、平成 2 年から同 13 年にかけてのべ 13 次にわたり行われた、松本市中山霊園拡張造成に伴う緊急発掘調査であり、平成 14 年度に行った整理・報告書作成作業とともに松本市教育委員会が実施した。
- 3 市教育委員会では中山霊園一帯に分布する古墳を中山古墳群と総称しており、発掘調査名の一部にもそれをを用いた。ただし、個々の古墳は中山地区全体で通し番号を付して把握しており（中山○号古墳）、第 1・2 分冊での記述は個々の古墳の通し番号で扱っている。
- 4 竪穴住居址は全調査にわたって、通し番号を付した。古墳・竪穴住居址以外の遺構は、調査次ごとに 1 号から名称を付したため重複がある。本文・図中で混乱が生じそうな場合は、遺構名の頭に調査次数を付した（例：VI 次 1 炭）。
- 5 本書の執筆は I が事務局、その他は直井雅尚が行った。
- 6 本書では発見された遺構の報告を主眼としており、出土遺物の図化と掲載は別の機会に譲る。
- 7 本書で用いた略記は次のとおりである。
○号土坑→○土、○号窯跡→○窯、○号炭焼窯→○炭、○号溝状遺構→○溝、○号灰原→○灰
- 8 遺跡位置図と「遺跡の環境」の項は第 1 分冊と同様なので省略した。第 1 分冊を参照されたい。
- 9 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄：内沢紀代子 遺物保存処理・復元注記：五十嵐周子、内沢紀代子、林和子、洞沢文江
遺構図整理・トレース・版組み：村山牧枝 写真撮影：（遺構）各調査担当者
総括・編集：直井雅尚
- 10 図中で用いた方位記号は真北方向を指している。
- 11 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒 390-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710）に収蔵されている。

目次

例言		4 第 XIII 次調査	5
目次、図目次	1	(1) 土坑	5
I 調査の経緯	2	(2) 暗渠	5
II 調査の経過と概要	2	VI 調査のまとめ	6
III 発見された遺構と遺物		抄録	
1 第 X 次調査	3	図目次	
(1) 須恵器窯	3	第 1 図 調査位置図	7
(2) その他の遺構	3	第 2 図 X 次調査丘陵部	8
2 第 XI 次調査	4	第 3 図 X 次調査谷状部	9
(1) 炭焼窯	4	第 4 図 X 次調査 P 区全体図、灰原	10
(2) 土坑	4	第 5 図 X 次調査須恵器窯	11
(3) 溝状遺構	5	第 6 図 X 次調査 P 区土層	12
(4) 畦状遺構	5	第 7 図 XI 次調査全体図	13
3 第 XII 次調査	5	第 8 図 XI 次調査炭焼窯・土坑	14
(1) 土坑	5	第 9 図 XII・XIII 次調査全体図	15
(2) 溝状遺構	5	第 10 図 XII 次調査土坑・溝址	16
(3) 出土遺物	5		

I 調査の経緯

- 1 調査に至る経緯（省略。第1分冊を参照されたい。）
- 2 調査の経過（省略。第1分冊を参照されたい。）
- 3 調査体制（第X～XIII次調査：平成11～13年度）

【平成11年度】第X次調査

調査団長：竹淵公章（松本市教育長） 調査担当者：太田圭郁（囑託）、加島泰裕（同）、堀久志（同）

協力者：青木雅志、飯田三男、今村克、入山正夫、菊池直哉、河野清司、興喜義、斉藤政雄、中村恵子、中山自子、福島勝、二木一男、布野行雄、布山洋、真々部まさ子、丸山恵子、道浦久美子、南山久子、山崎照友

事務局：木下雅文（文化課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（囑託）

【平成12年度】第X・XI・XII調査

調査団長：竹淵公章（松本市教育長） 調査担当者：赤羽裕幸（主事）、太田圭郁（囑託） 調査員：森義直

協力者：青木雅志、今村克、河野清司、中山自子、福島勝、布山洋、丸山喜和子

事務局：木下雅文（文化課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（囑託：～H12.6）、渡邊陽子（囑託：H12.7～）

【平成13年度】第XIII次調査

調査団長：竹淵公章（松本市教育長） 調査担当者：赤羽裕幸（主事）、太田圭郁（囑託）

協力者：今村克、河野清司、福島勝

事務局：有賀一誠（文化課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（囑託）、塚原祐一（同）

II 調査の経過と概要

1 第X次調査（平成11・12年度）

中山49号古墳南方の丘陵部分と、その西側の谷状部分を対象とした。平成11年4月27日から同12年1月21日まで現場作業を行い、未了分について翌12年6月1日から7月17日まで追加の現場作業を実施した。実働は平成11年度が154日、12年度が33日である。調査面積は11年度が6,851㎡、12年度が329㎡で計7,180㎡となった。

丘陵部分は工事で完全に削平されてしまうため、全体を測量し、微地形を把握するために等高線図を作成した。また、未発見の古墳が存在する可能性があり、尾根筋や頂上部、不自然な膨らみがある地点などにトレンチを設定して掘り下げを行った。古墳の存在は確認できず、めばしい遺構、遺物の発見もなかった。谷状部分は南北に細長いのでA区からP区までの16の区に分割して調査を進めた。各区の底地周辺では自然木を包含する地層が認められ、環状に分布する杭状の木質や微量の土器が出土した。P区の東側斜面では須恵器を焼成した窯窯1基と付属施設、その下部や周辺で灰原が発見され、多量の窯滓、窯壁、須恵器破片が出土した。須恵器窯は新発見なので谷状部分の地名を採って「不動沢1号窯」と命名した。出土した須恵器は8世紀前半に属するとみられる。

2 第XI次調査（平成12年度その2）

第X次調査より100mほど北の緩斜面が対象となった。平成12年9月27日から同年12月7日まで現

場作業を行い、955㎡を調査した。炭焼窯 4 基と土坑 24 基を発見したが、遺物は土器や黒曜石がわずかに出土したのみである。炭焼窯からは炭化物が少量出土している。

3 第XII次調査（平成 12 年度その 3）

昭和 40 年代に造成された中山霊園中央部の緑地帯に新たな墓地造成が行われるため、平成 12 年 7 月 28 日から同年 8 月 28 日まで現場作業を実施した。開発担当部局との協議の関係でXI次調査より先行して行われたため、回数と実施期間が前後している。190㎡を調査した。かつての造成工事により調査地の南西部分は削平されていたが、他の部分から土坑 24 基と溝址 2 条が発見された。遺物は古墳時代とみられる土器小片 4 点と窯壁 2 点である。

4 第XIII次調査（平成 13 年度）

中山霊園北側斜面の元耕作地を対象として、平成 13 年 7 月 31 日から同年 10 月 30 日まで現場作業を実施した。最初に試掘トレンチを 9 本設定して土層や礫の重なり具合を確認し、次いで本調査に移行した。253.9㎡を調査し、土坑 9 基と暗渠跡 3 本を検出した。時期は特定できない。遺物は少なく、縄紋時代と古墳時代に属するとみられる土器小片 7 点と黒曜石 2 点のみである。

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 第X次調査（平成 11・12 年度）

(1) 須恵器窯（不動沢第 1 号窯跡、第 4・5 図）

谷状部分に設定した調査区の最南端に位置する P 区の、北東から南西に向かって大きく下る斜面から発見された。標高 771.64 ～ 773.24m にあたる。被熱により酸化と還元した窯壁の範囲を含め全長 376cm、幅は最大で 120cm、主軸は N-52-E を指す。下部の 50cm ほどの区間が燃焼部とみられ、床面は水平に近く、下面には厚い被熱層が形成されている。焼成部の傾斜は前半の 200cm が 20 度、その奥側の 60cm は 37 度と傾きを増す。最奥部の 60cm は 15 度と再び傾斜は緩くなり、排煙部が近かったのかもしれない。焼成部前半には長径 120cm の舟底状土坑があり、大きく床面を掘り込んでいるが、それを埋めて床面を構築している。窯壁は内側が還元された青灰色で硬く焼き締まり、その外周が酸化で赤褐色や赤紅色を呈している。焼成部の中央付近では側壁の還元層の上にさらに酸化層が重なる部分があり、補修をしたとみられる層も認められた。床面では最初に形成されたとみられる還元・酸化層が舟底状土坑に切られ、その後に土坑を埋めるように再び床面が構築されていた。これらは 2 回以上の操業があったことを示すものと考えられる。覆土は横方向が水平、長軸方向は床面の傾斜に沿った堆積をしており、大小のブロック状になった還元や酸化した窯壁片が多量に混入していた。焼成部前半の最終操業とみられる床面に接して須恵器の大小破片が 20 数点出土した。杯 A、杯 B、甕などの器種がある。

窯跡の下端の脇には土坑状の窪みが 2 カ所あり、内部から窯壁や焼土が出土したので灰原の一種として扱った（1 灰、2 灰）。1 灰は深さが 5 ～ 10cm ときわめて浅く自然の窪みの可能性もあるが、埋土に焼土や炭化物、窯壁が含まれていた。2 灰は中央部に地山の大礫が露出していたが、埋土に焼土が含まれていた。

窯跡下方は谷状部分の底部に近く、灰原の存在を予想して一帯の掘り下げを行った。きわめて粘性の強い黒色土や灰色系の土層が厚く堆積していたが、その中から大量の須恵器と窯壁が出土した。これらの出土範囲から本窯跡の灰原は南北 6m、東西 5m ほどの範囲に広がっていたことがわかる。須恵器と窯壁の総量は 158.3kg に及ぶ。須恵器の器種器形を概観すると杯 A、杯 B、蓋 B、壺類、大甕などがある。

(2) その他の遺構

谷状地形に設定した調査区の H 区から礫集中、L 区から風倒木痕、M 区から土坑 1 基がみついている。

前 2 者は人為的なものではなく、土坑も規模や形態から同様であろう。各区の谷の底部は湿地性の堆積で木質が残存していたが、特に P 区の谷の底部からは杭を打ち込んだように直立する木質が環状に並んで検出された。周辺からは少量の縄紋後期の土器片が出土し、その時期に何らかの人為的な行為があった可能性を窺わせた。

丘陵部分では 8 カ所の石垣と 5 本の石列を確認したが、平面や断面観察の結果、近世以降に積まれたものと判断した。

2 第 XI 次調査（平成 12 年度）

(1) 炭焼窯

ア 第 1 号炭焼窯（第 8 図）

調査地中位の西端部に位置する。斜面の傾斜に沿った立地で、北東が高く南西が低い。遺構の切り合いはない。平面形はやや不整な隅丸長方形で、中軸線は N-52-E を指す。長軸が 2.96m、短軸は 1.44 ～ 1.56m、深さは 12 ～ 20cm を測る。低い方の短辺から煙出しとみられる長さ 1.36m、幅 24 ～ 30cm の溝が延びているが、やや湾曲している。底面は平坦で 4 ～ 5 度の緩い傾斜をもち、40 ～ 60cm ほどの焼土面が 4 カ所残っていた。覆土は大きく 3 層に分かれる。底面直上に広がるⅢ層は黒色土で炭化物塊や焼土粒、黄橙色粘土塊を含む。

イ 第 2 号炭焼窯（第 8 図）

調査地中位の東端近くに位置する。斜面の傾斜に沿った立地で、北東が高く南西が低い。畦状遺構に接する。平面形は隅丸長方形で、中軸線は N-36-E を指す。長軸は 304cm で、これに 60cm ほどの焚口とみられる突出が付き、短軸は 160cm、深さは 32 ～ 36cm を測る。底面は平坦で 5 ～ 7 度の傾斜をもち、中央部に長軸線に沿って幅 12 ～ 20cm の溝が掘られている。南西隅から焚口の付け根部にかけて炭化物が大きな塊で残っていた。覆土は大きく 5 層に分かれ、最下層の V 層には炭化物がブロック状で含まれていた。

ウ 第 3 号炭焼窯（第 8 図）

調査地南端部にあり、本址の部分のみ調査区を拡張して全掘した。斜面の傾斜に沿った立地で、北が高く南が低い。土坑を切っているが、本址の付属施設だった可能性もある。平面形は長大な隅丸長方形で、中軸線は N-5-E を指す。長軸は 536 ～ 544cm、短軸は 152cm、深さは 16 ～ 24cm を測る。下端の短辺は中央部が 30cm ほど全体的に張り出しており、焚口と推定される。底面は平坦で 11 度の傾斜を有す。中央部に長軸線に沿って幅 12 ～ 20cm の溝が掘られているが、上端の短辺まで達していない。覆土は 3 層からなり、最下層のⅢ層には多量の炭化物がブロック状で含まれていた。焚口部には大量の焼土が塊状や粒状で残っていた。

エ 第 4 号炭焼窯（第 8 図）

調査地中位の西寄りに位置する。平面形は長軸 120cm、短軸 65cm の小形の隅丸長方形を呈し、深さは 30cm を測る。斜面の傾斜にほぼ直行する等高線に沿った立地で、中軸線は N-7-W を指す。遺構の切り合いはない。底面は平坦でほぼ水平である。壁面には被熱により硬化した部分が各所に残っていた。覆土は上下 2 層に分かれ、Ⅱ層には多量の炭化物が塊状や粒状で含まれる。本址は平面形が他の炭焼窯のような長大な長方形を呈していないが、壁面の被熱硬化や、覆土の下層に多量の炭化物があったこと、形態と立地が本遺跡第 VII・VIII 次調査で発見された第 11 ～ 13 号炭焼窯に類似することから、炭焼窯であると判断した。

(2) 土坑（第 8 図）

大小の窪みを 40 カ所以上検出し、最終的に 25 基を土坑として把握した。しかし、明らかに遺構と判断できるものはなかった。24 土・26 土・27 土の 3 基を図示したが、26 土・27 土は浅く、24 土は深い形状

や土層から風倒木痕と推定できる。

(3) 溝状遺構 (第7図)

調査地北部を一直線に横断している。調査区内の長さは25.3m、幅は20～30cmで、壁と底の区別ができない緩い掘り込みで深さは最大でも10cmに達しない。時期の特定はできなかったが、畦状遺構と方向が一致しており、近世・近代以降の所産である可能性が高い。

(4) 畦状遺構 (第7図)

調査地南側にあり、南北に延びる幅20～30cmの浅い溝が、北側の始点を揃えるよう31本並んでいた。長さは2.3m～5.3mとまちまちで、途中でいったん途切れたごとくにみえるものもあった。10cm以下と浅く、壁と底の区別ができない緩い掘り込みである。溝間の幅は30～90cmと不揃いだが、概して30～50cmが多い。時期の特定はできないが、北側の掘り込みの始点を結ぶラインが溝状遺構と一致しており、近世・近代以降の所産である可能性が高い。

3 第Ⅱ次調査 (平成12年度)

(1) 土坑 (第10図)

24基の土坑を検出した。平面形はすべて円形を基調としており、4土と19土は直径が100cm近いが、他は40～60cmの小規模なものである。深さは最深のもので35cm(4土・23土)を測るが、15cm内外の浅いものも多い。6土～13土は360cm×520cmの長方形に配列しており、1間×3間の掘立柱建物であった可能性も考えられるが、柱痕はなく、柱穴としてもかなり小さい。同様に20土～23土も232cm×296cmの方形配列で1間四方の掘立柱建物の可能性も考えられ、土層の形成に人為的なものが窺えるが、やはり柱穴としては規模が小さい。ここでは積極的に掘立柱建物とはせず、その可能性を指摘するに止めたい。4土は平坦な底面とわずかに袋状をなす垂直の壁が特徴的で、上層は硬く締まっていた。

(2) 溝状遺構 (第10図)

調査区の中央部に東西に連なるように並んで2基が確認された。1溝は長さ3.2m、2溝は2.8mで、幅はいずれも20～40cmを測る。深さも5～12cmと類似している。元来は連続した溝であった可能性がある。

(3) 出土遺物

遺構に伴う遺物はなかったが、遺構外から土器片と石器の剥片、窯壁が散発的に出土した。土器片には紋様はなく、厚手のため古墳時代に属する可能性が高い。石器の剥片は数点あり、黒曜石も含まれているので縄紋時代に属するとみられる。窯壁は5cmほどの大きさで、暗灰色を呈す。調査地周辺では鍬形沢古窯址や不動沢古窯址が発見されているが、前者と今回調査地との距離は520m、後者とは420mあり、しかも調査地の方が前者より70m、後者より40m高所にあるため、そこから由来するものか即断はできない。

4 第Ⅲ次調査 (平成13年度)

(1) 土坑

落ち込みや窪みを16カ所検出し、うち9基を土坑と捉えたが、いずれも自然も落ち込みである可能性が高い。平面形はみなきわめて不整な円形や楕円形で、規模は最大が2土の直径240cm、最小が3土の40cmである。

(2) 暗渠

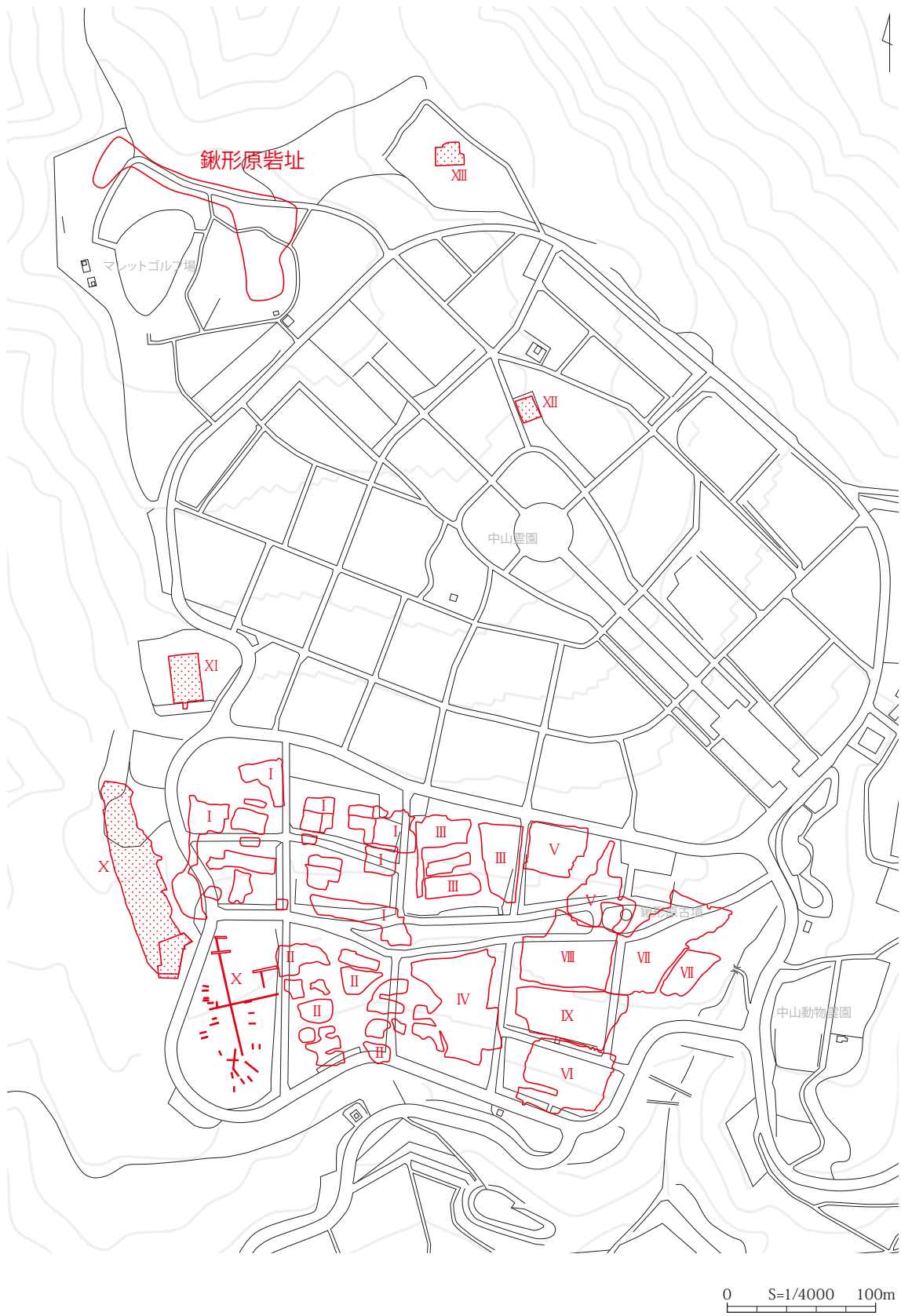
調査区の中央に自然堆積とみられる大小の礫が入り混じった部分が広がっており、その東西両側に現地表面下より掘り込まれた溝状の遺構が3本確認された。礫が詰められており近現代の暗渠とみられる。

IV 調査のまとめ

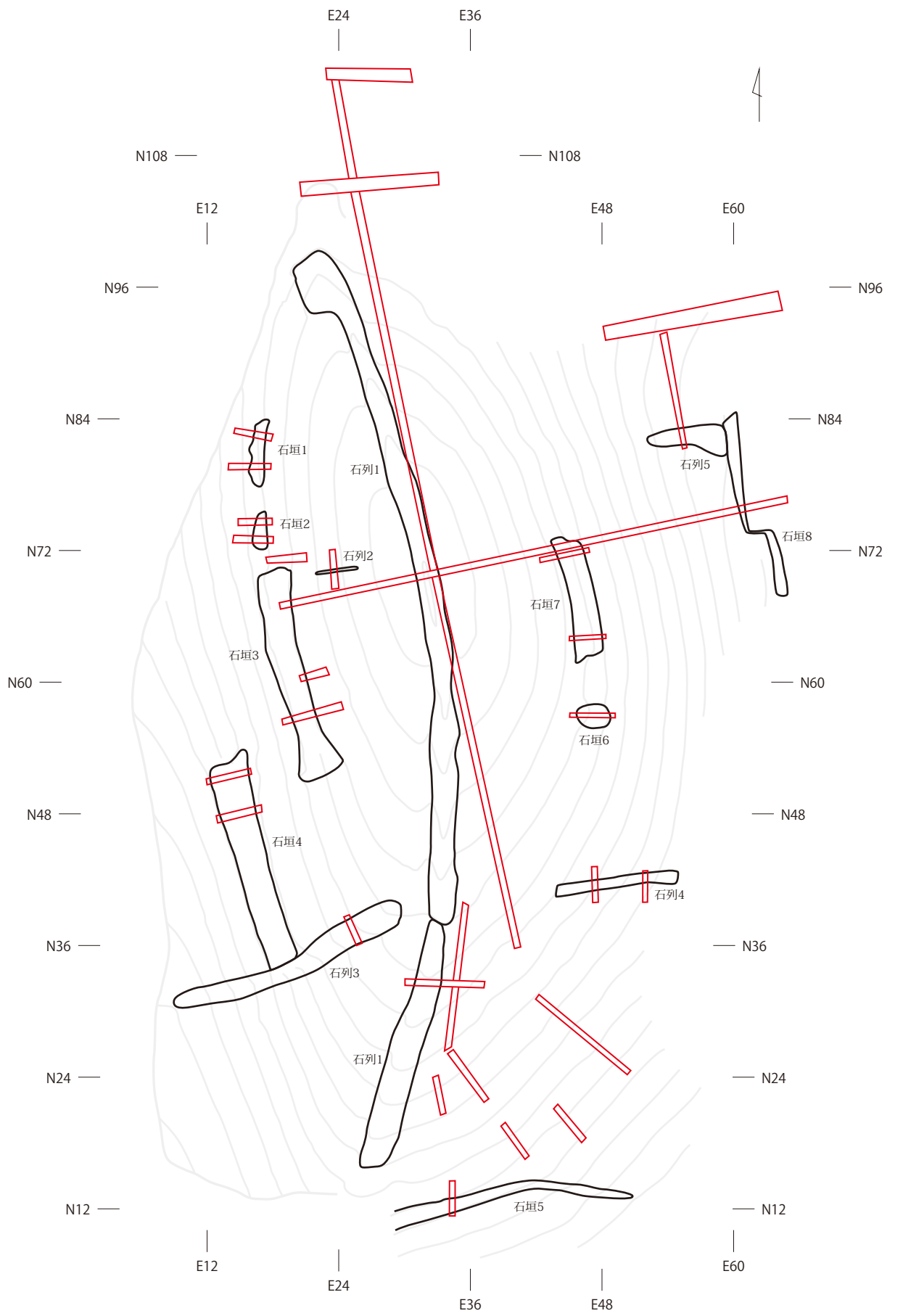
第X～XIII次調査では、それ以前の調査のような古墳の石室や縄紋・弥生時代の集落址の検出はなかった。しかし、須恵器窯の発見はまったく予想外で、中山丘陵での発掘調査の中でひととき意義の大きいものとなった。第III次調査の際に鍬形沢古窯址を発見し、丘陵内に須恵器窯が存在することはわかっていたが、調査対象地外のため踏査と表採、地形の略測を行ったにすぎず、窯跡の構造や遺物の詳細は把握できていない。その点で今回の不動沢第1号窯跡の調査は窯体すべてを発掘し、灰原から多量の遺物も得られており、今後、遺物の整理が進めば松本平における須恵器窯研究に大いに益するものとなろう。また、XI次調査で4基の炭焼窯が発見され、一連の調査で発見された炭焼窯の合計は29基となった。中山丘陵の南向き斜面全域に分布することが明らかになり、この種の生産遺構について究明を深める一助となれば幸いである。

第1表 中山霊園拡張に伴う中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址・不動沢古窯址発掘調査成果一覧

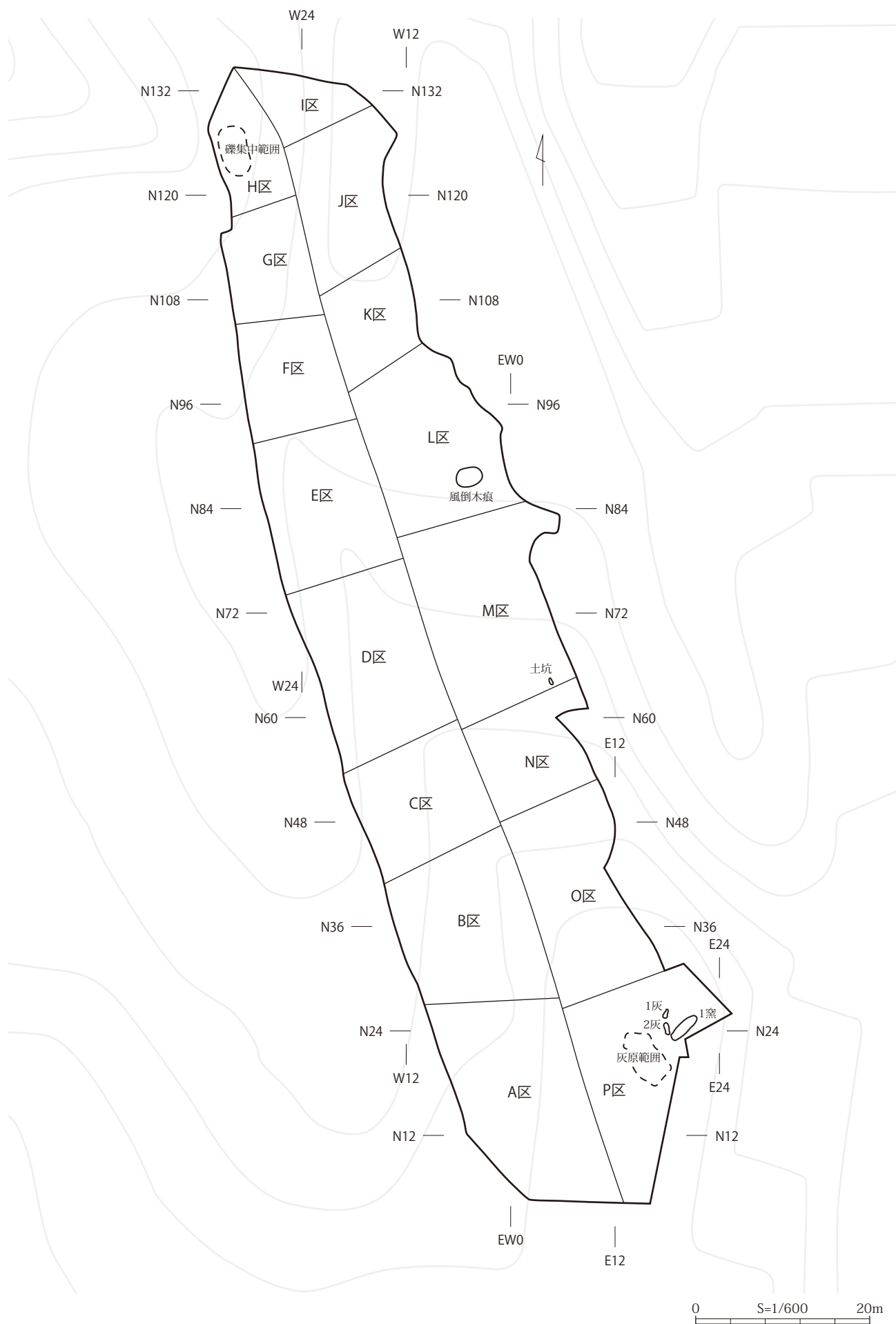
年次	期間	面積	発見された遺構	出土した遺物	所見・備考	
2	I	4/27～8/31	6,300	古墳7(16・49～54墳)、土坑8、溝1、炭焼窯1、集石2、石垣23、石積1、石列1	土師器・須恵器・陶磁器、武器(剣1、刀2、鉄鏃10以上)、装身具(耳環5、白玉2、小玉2)	50～54号は湮滅古墳で周溝と石室底部のみ検出。石垣は近世以降
3	II	4/23～6/1	8,400	土坑1、溝1	土師器・須恵器	外周道路部も調査
4	III	5/20～7/30	3,760	古墳2(38・55号)、土坑36、炭焼窯4、暗渠、須恵器窯2(確認のみ)	土師器・須恵器・陶磁器、馬具、武具、耳環、玉類(管玉、勾玉、丸玉、双孔円盤)	須恵器窯は鍬形沢古窯址群と命名。鍬形原砦址トレンチ調査
5	IV	4/20～5/21	3,033	炭焼窯2、土坑25、ピット、溝1	須恵器、土師器、炭	
7	V	5/8～8/4	2,400	炭焼窯8、土坑14、配石遺構1、縄紋時代遺物包含層	土師器、須恵器、炭化物・炭	鍬形原砦址トレンチ調査。炭焼窯1基現状保存
8	VI	6/6～8/23	2,200	住居址7(縄紋2、弥生4、不明1)、炭焼窯5、土坑102、集石土坑3、溝4、竪穴状遺構3、ピット多数	縄紋土器(中期・後期)、弥生土器、石器(石斧・鏃、凹石)、炭化物、炭化米	縄紋・弥生集落址は鍬形原遺跡と命名
9	VII	5/16～11/19	3,676	住居址5(縄紋中期)、土坑138、集石土坑1、ピット群2(住居址1)、溝3、炭焼窯1、黒色土	縄紋土器、須恵器、石器(有舌ポイント・鏃・石斧・凹石)	縄紋集落
	VIII	8/25～10/7	2,682	土坑67、ローマウンド3、ピット群3(住居址3)、溝1、炭焼窯3、配石1、黒色土	縄紋土器、須恵器、石器(鏃・石斧・石皿)、炭	縄紋集落の土坑分布域
10	IX	4/20～7/31	2,030	住居址13(縄紋中期8、弥生5)、土坑76、ピット、古墳1(57号)、炭焼窯1、竪穴状遺構3	縄紋土器、弥生土器、須恵器、石器(鏃・石斧)	縄紋・弥生集落。57号古墳は湮滅古墳で周溝の一部と石室底部のみ検出
11	X	4/27～1/21	6,851	須恵器窯1(8C)、同灰原	縄紋土器、土師器、須恵器、窯壁、窯滓	西側谷状部分の調査。須恵器窯は不動沢古窯址と命名。西側独立丘陵にトレンチ
12		6/1～7/17	329			
12	XI	9/27～12/7	955	土坑25、炭焼窯4	土師器、陶磁器、石器、炭化物	
	XII	7/28～8/28	190	土坑24	土師器、石器、炭化物、窯壁	
13	XIII	7/31～10/30	254	土坑9、暗渠跡3	土師器、石器	
合計			43,060(m ²)	縄紋時代：住居址15、土坑382、集石土坑4 弥生時代：住居址9 古墳時代：古墳10(16・38・49～55・57号)、土坑1、溝2 奈良・平安時代：炭焼窯29、須恵器窯3、配石2 中世：砦の空堀(トレンチで確認) 時期不明：住居址1、土坑141	縄紋土器(中期・後期)、弥生土器(後期)、土師器、須恵器、石器(有舌ポイント・鏃・石皿・凹石)、武具(剣・刀・鉄鏃)、馬具(轡・鞍)、装身具(耳環・玉類)、炭化物・炭、骨、窯壁 ※総量は整理用コンテナー115箱	鍬形原遺跡：縄紋・弥生時代の集落跡を新発見・命名。 奈良時代の炭焼窯を発見。 鍬形沢古窯址群・不動沢古窯址：奈良時代の須恵器窯を新発見・命名。 中山古墳群：古墳10基のうち8基を新発見・命名。 鍬形原砦址：空堀の存在を確認。



第1図 調査位置図 (I~XIII次)

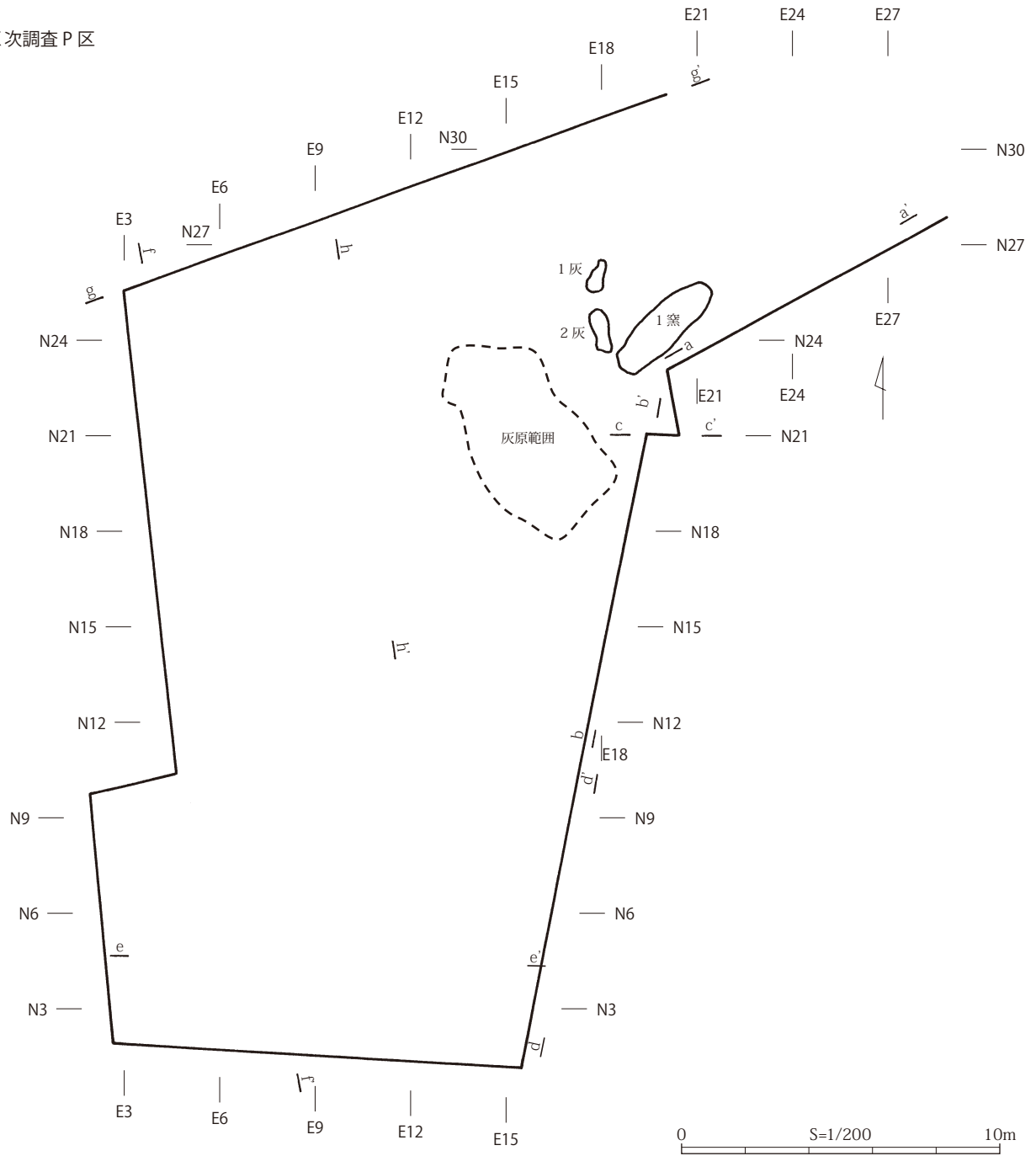


第 2 図 X 次調査丘陵部

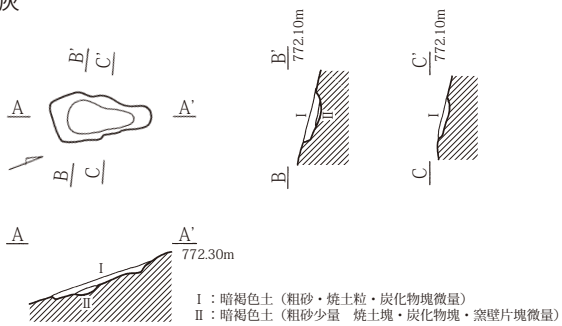


第3図 X次調査谷状地形

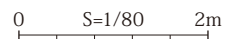
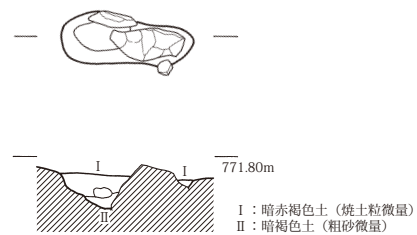
X次調査P区



1灰

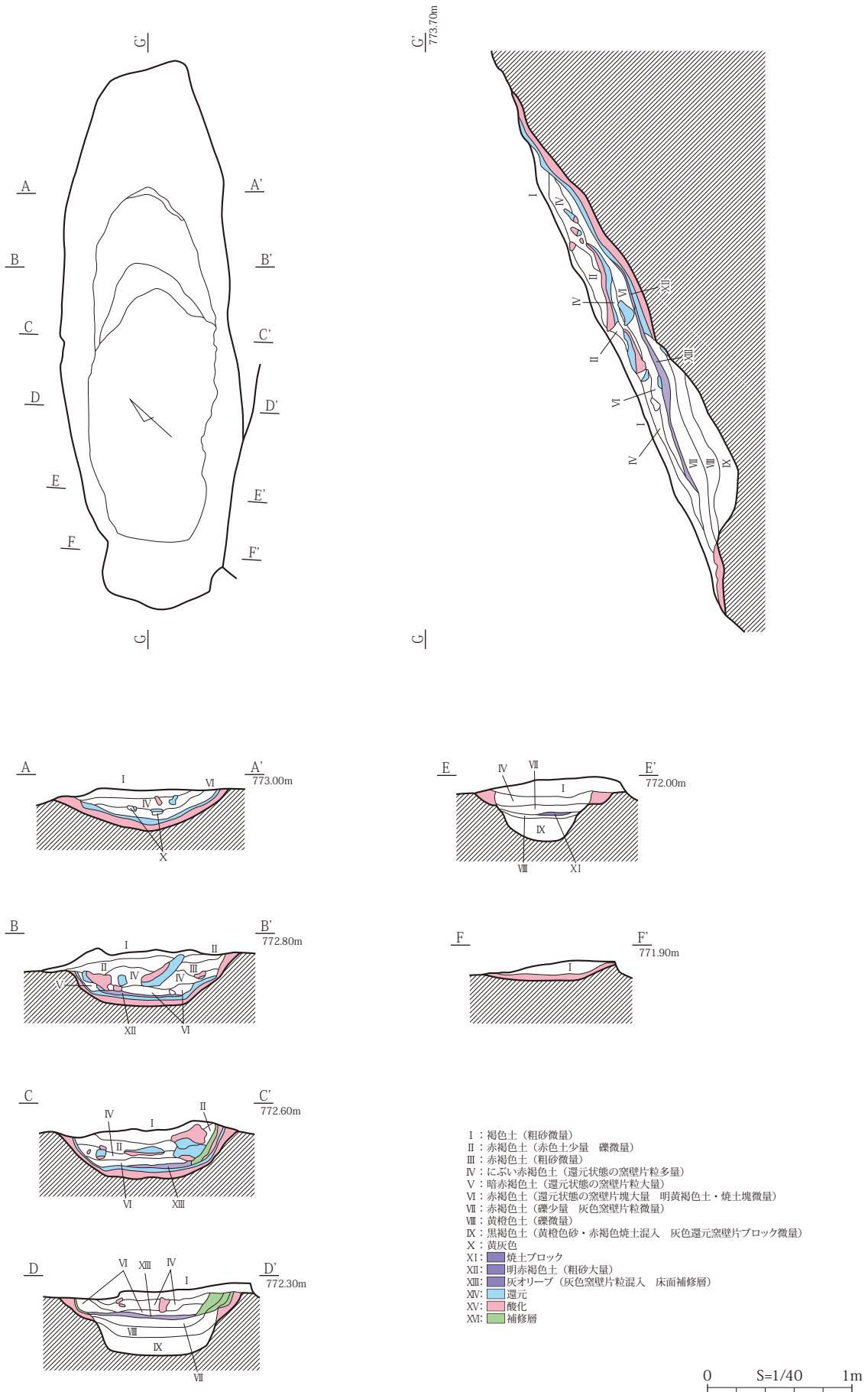


2灰

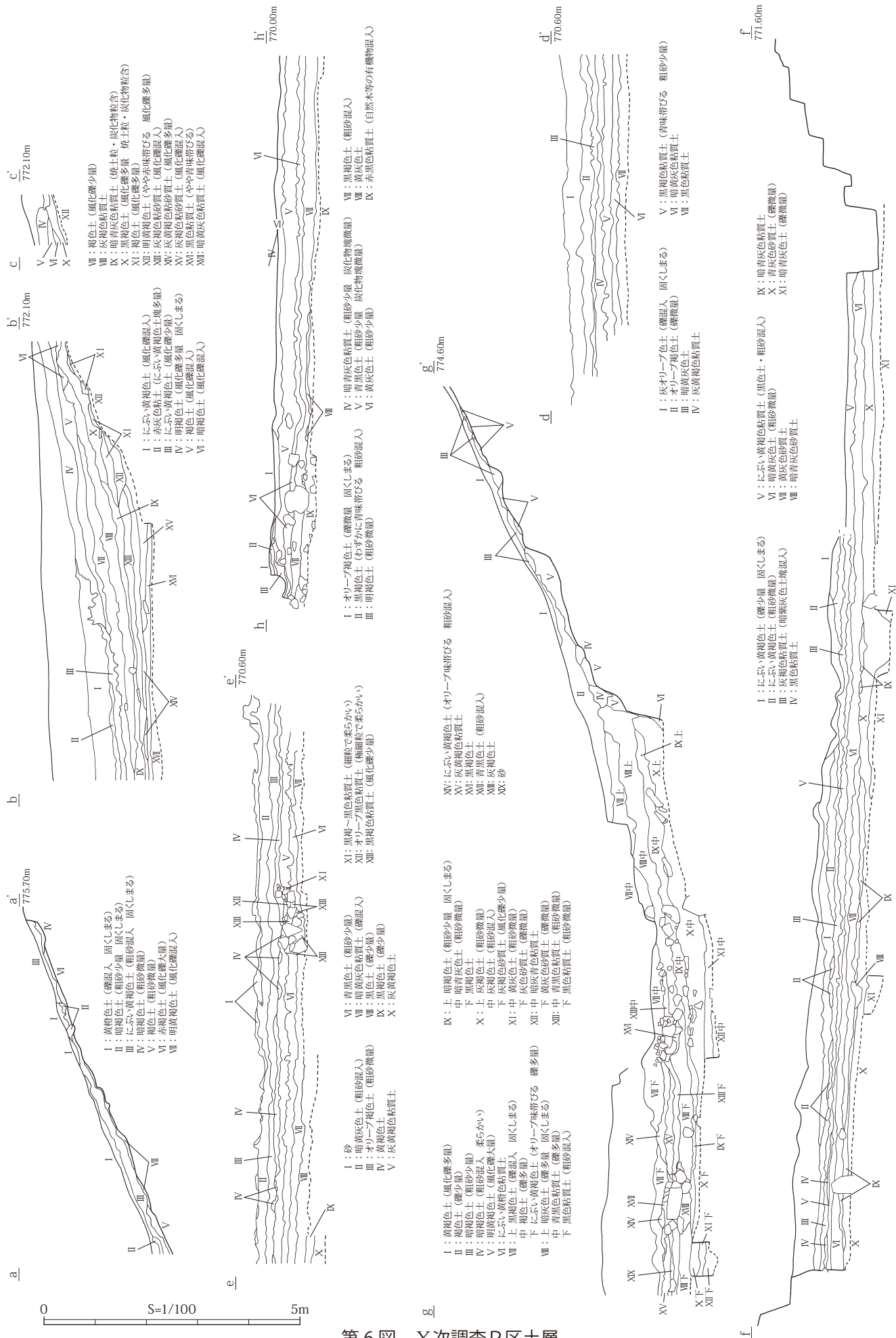


第4図 X次調査P区・灰原

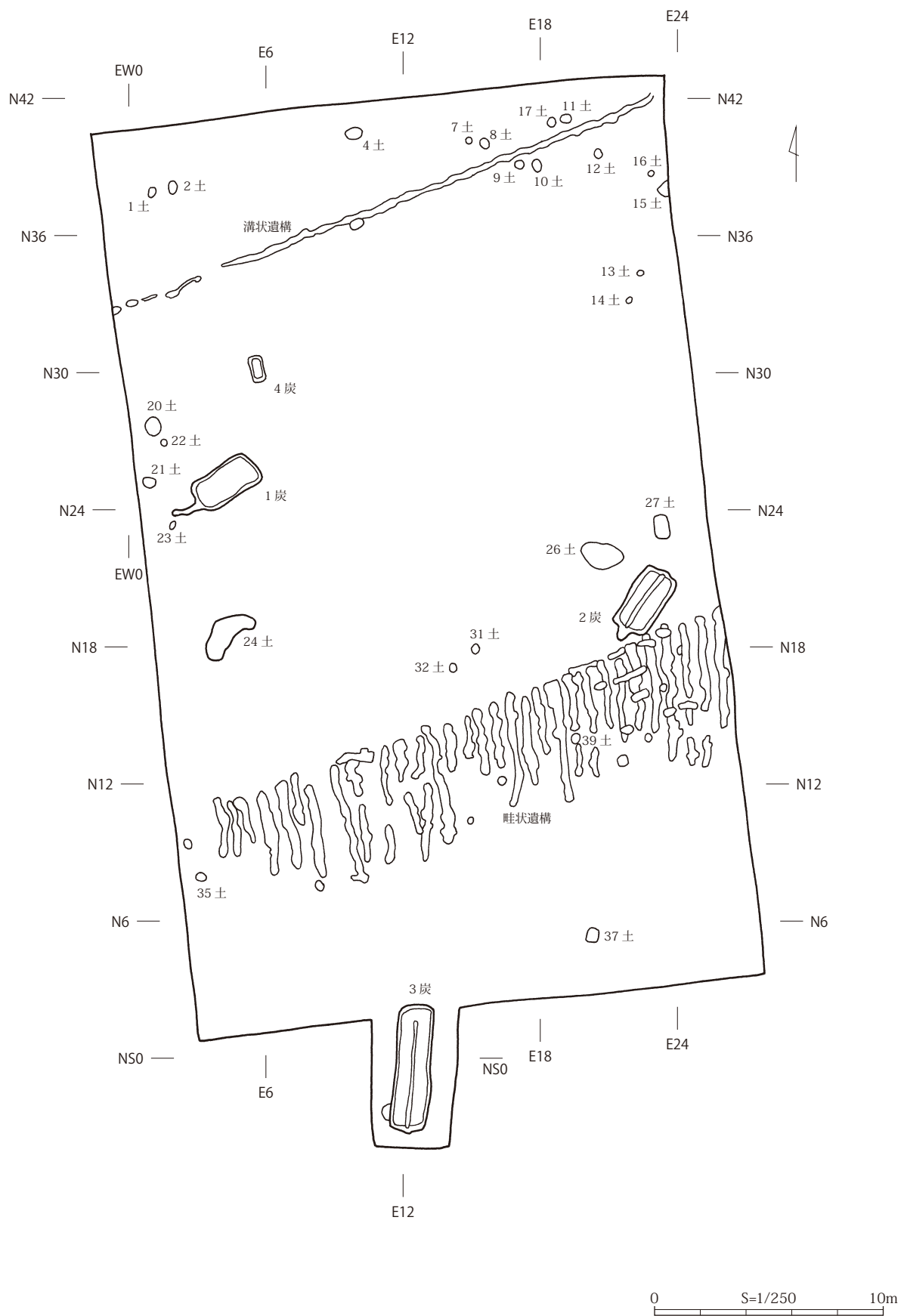
第1号窯跡 (須恵器窯)



第5図 X次調査須恵器窯

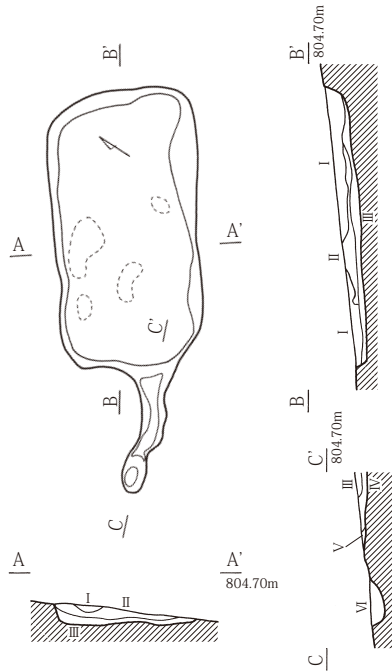


第6図 X次調査P区土層



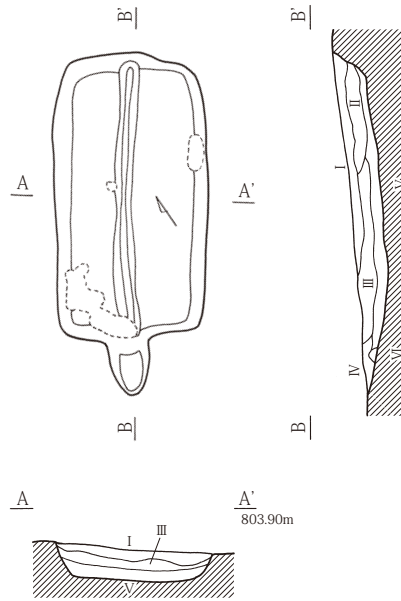
第7図 XI次調査全体図

第1号炭焼窯



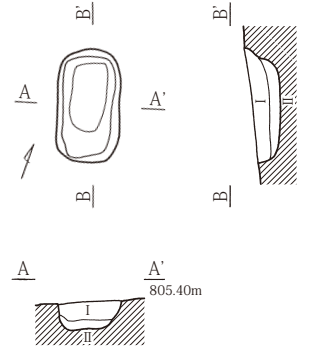
- I : 褐色土 (炭化物粒微量)
- II : 黒褐色土 (炭化物粒・塊微量)
- III : 黒色土 (黄褐色粘土・炭化物塊混入 焼土粒微量)
- IV : 黒褐色土 (明黄褐色粘土塊混入 炭化物粒少量)
- V : 灰黄褐色土
- VI : 灰黄褐色土 (明黄褐色粘土粒・炭化物粒少量)

第2号炭焼窯



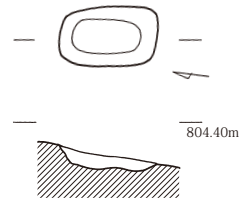
- I : にぶい黄褐色土 (炭化物粒・焼土粒微量)
- II : 灰褐色土 (炭化物・塊少量 焼土粒塊微量)
- III : 黒褐色土 (炭化物粒少量)
- IV : 灰黄褐色土 (炭化物粒微量)
- V : 黒褐色土 (炭化物塊・ブロック混入 明黄褐色粘土・焼土少量)
- VI : 焼土

第4号炭焼窯



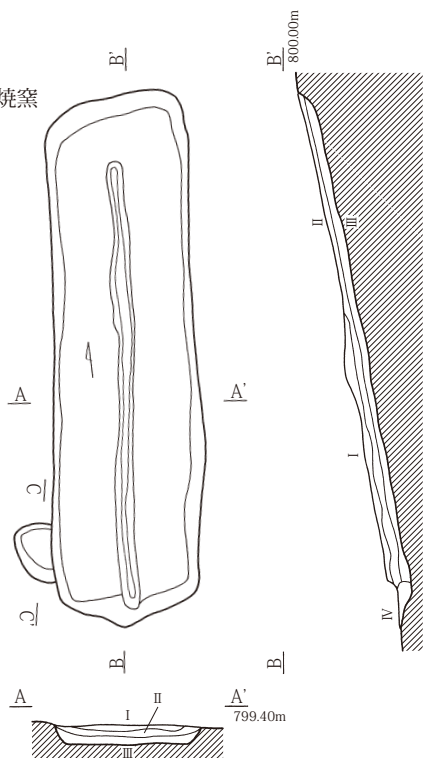
- I : 暗褐色土 (炭化物粒・焼土粒微量)
- II : 黒褐色土 (炭化物粒・塊多量 焼土塊・ブロック微量)

27土

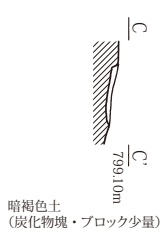


第3号炭焼窯

第3号炭焼窯



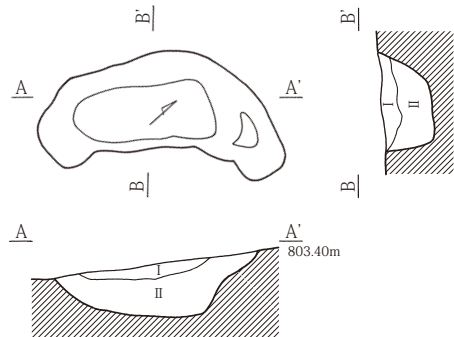
1土(3炭)



- 暗褐色土 (炭化物塊・ブロック少量)

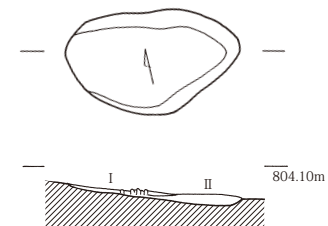
- I : 灰黄褐色土
- II : 黒褐色土 (炭化物粒微量)
- III : 灰黄褐色土 (炭化物塊・ブロック多量 明黄褐色土混入)
- IV : 明褐色土 (焼土粒・塊大量)

24土

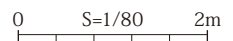


- I : にぶい黄褐色 (風化礫微量 固くしまる)
- II : 暗褐色土

26土

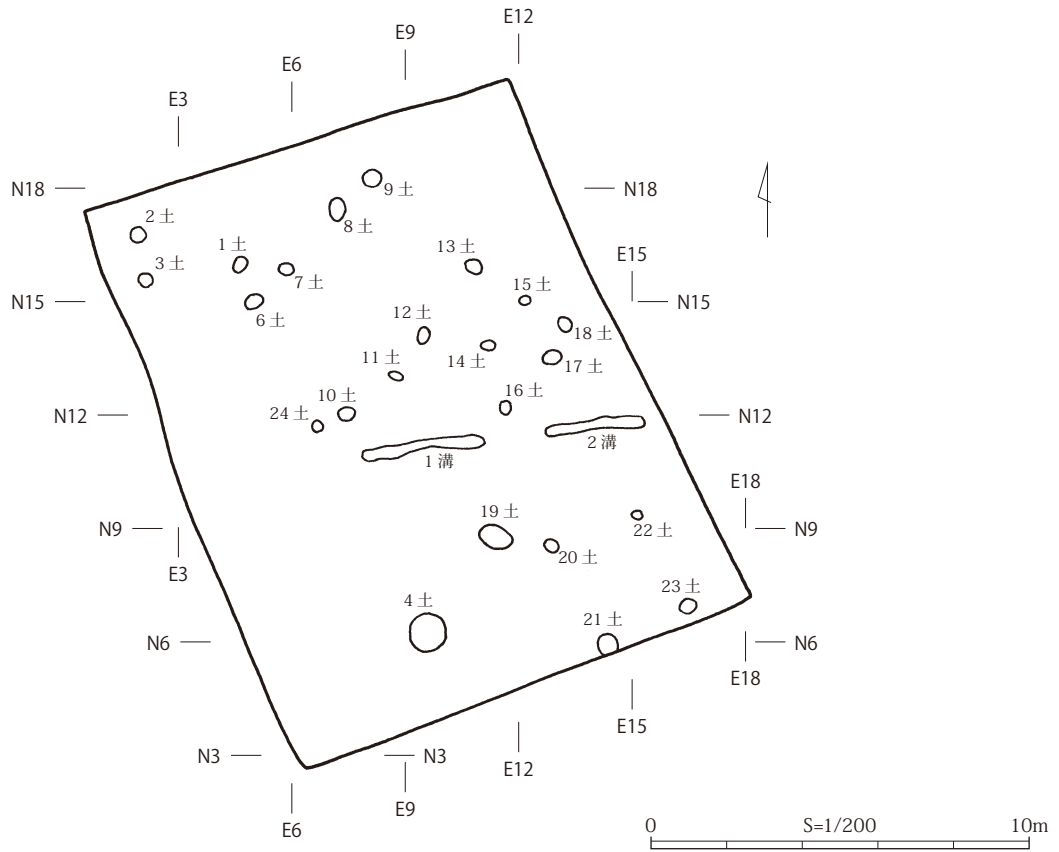


- I : 黒褐色土 (炭化物ブロック混入 やや柔)
- II : 暗褐色土 (風化礫微量 やや固)

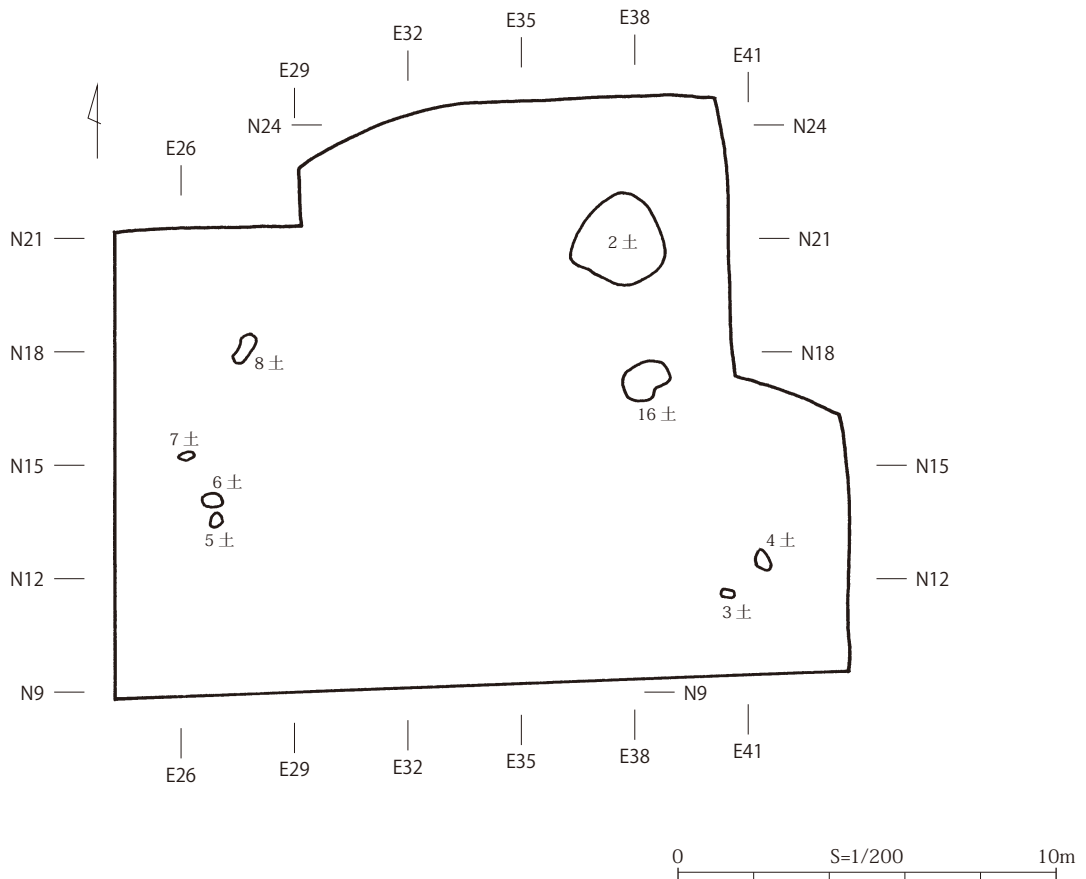


第8図 XI次調査炭焼窯・土坑

XII次 調査区

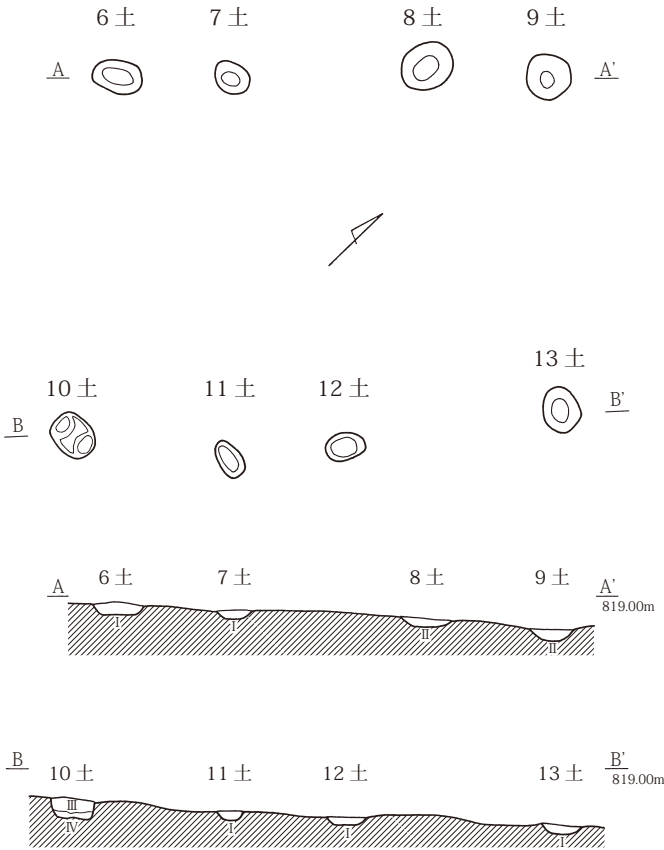


XIII次 調査区



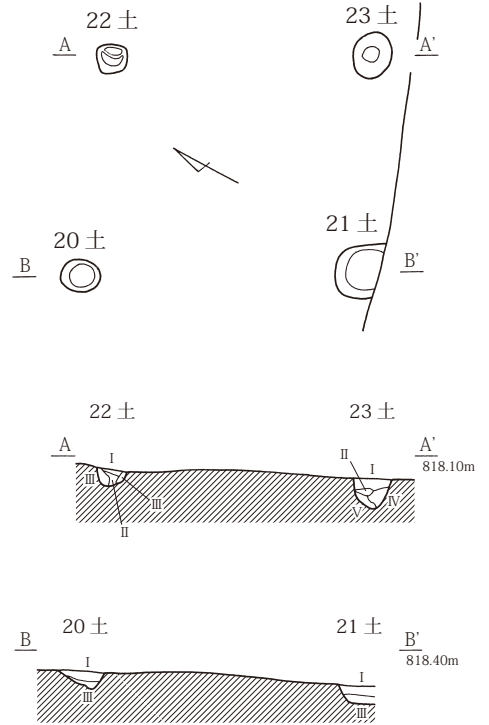
第9図 XII・XIII次調査全体図

6～13土



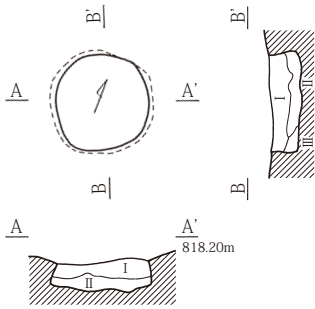
I : 暗褐色土 (炭化物粒微量)
 II : 暗褐色土 (炭化物粒少量)
 III : 褐色土 (柔らかい)
 IV : にぶい黄褐 (明黄褐色土混入)

20～23土



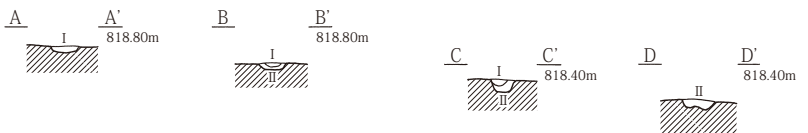
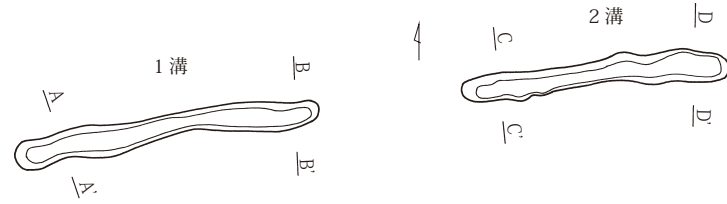
I : 暗褐色土
 II : にぶい黄褐色土
 III : 褐色土
 IV : にぶい黄褐色土 (明黄褐色土混入)
 V : 灰黄褐色土 (炭化物粒微量)

4土



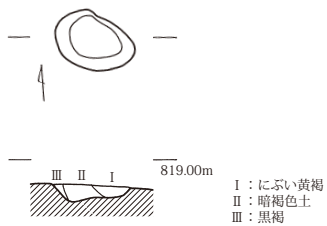
I : 黒褐色土 (明黄褐色土粒・炭化物粒微量 固くしまる)
 II : 黒褐色土 (明黄褐色土塊・炭化物粒少量)
 III : 黒褐色土

1・2溝

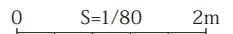


I : 黒褐色土 (炭化物粒微量)
 II : 暗褐色土 (明褐色土粒多量)

19土



I : にぶい黄褐
 II : 暗褐色土
 III : 黒褐



第10図 XII次調査土坑・溝址



中山古墳群周辺の航空写真 上が北東 (縮尺 1/5000)



X次調査 丘陵部
東から



X次調査 谷状地形
南から



X次調査 谷状地形
北から



X次 不動沢第1号窯跡 遺物出土状況 (1)



X次 不動沢第1号窯跡 完掘状況 (1)



X次 不動沢第1号窯跡 遺物出土状況(2)



X次 不動沢第1号窯跡 遺物出土状況(3)



X次 不動沢第1号窯跡 検出状況



X次 不動沢第1号窯跡 断面掘削状況



X次 不動沢第1号窯跡 断面 (A)



X次 不動沢第1号窯跡 断面 (B)



X次 不動沢第1号窯跡 断面 (C)



X次 不動沢第1号窯跡 断面 (E)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (1)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (2)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (3)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (4)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (5)



X次 不動沢第1号窯跡 たち割り (6)



X次 不動沢第1号窯跡 舟底状土坑



X次 不動沢第1号窯跡 完掘状況 (2)



X次 不動沢第1号窯跡 完掘状況 (3)



X次 不動沢第1号窯跡 完掘状況 (4)



X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (1)



X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (2)



X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (3)



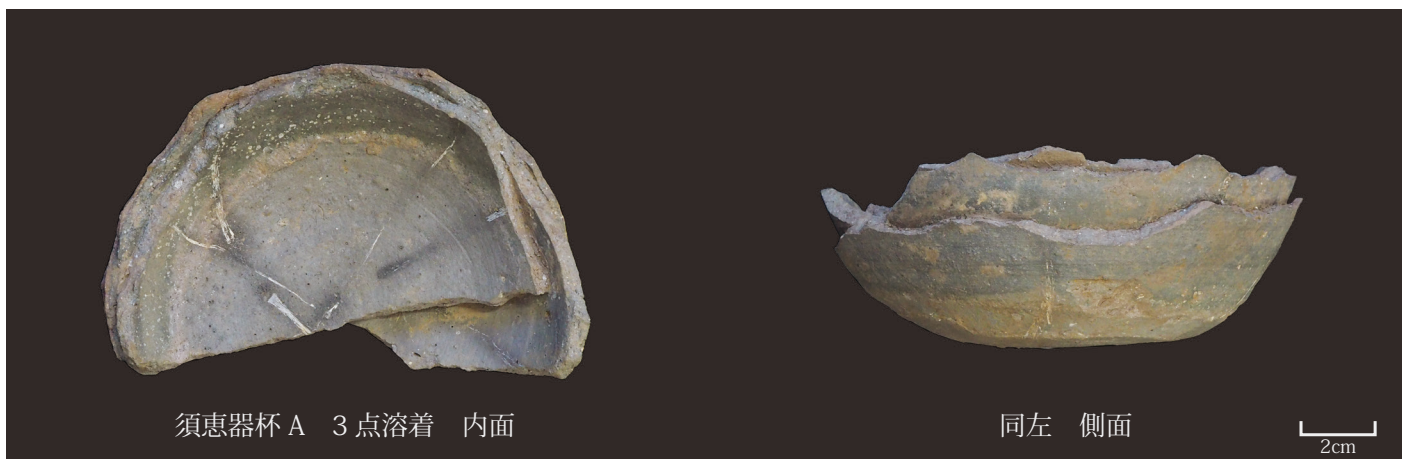
X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (4)



X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (5)



X次 不動沢第1号窯跡 灰原遺物出土状況 (6)



須恵器杯 A 3点溶着 内面

同左 側面

2cm

X次 出土遺物 (1)



須恵器杯 A 6点溶着 底部



同左 内面



須恵器杯 A 6点溶着 底部



同左 欠損断面



須恵器壺 側面



同左 内面



須恵器杯 B 底部



同左 内面
別個体の杯 B 高台と溶着

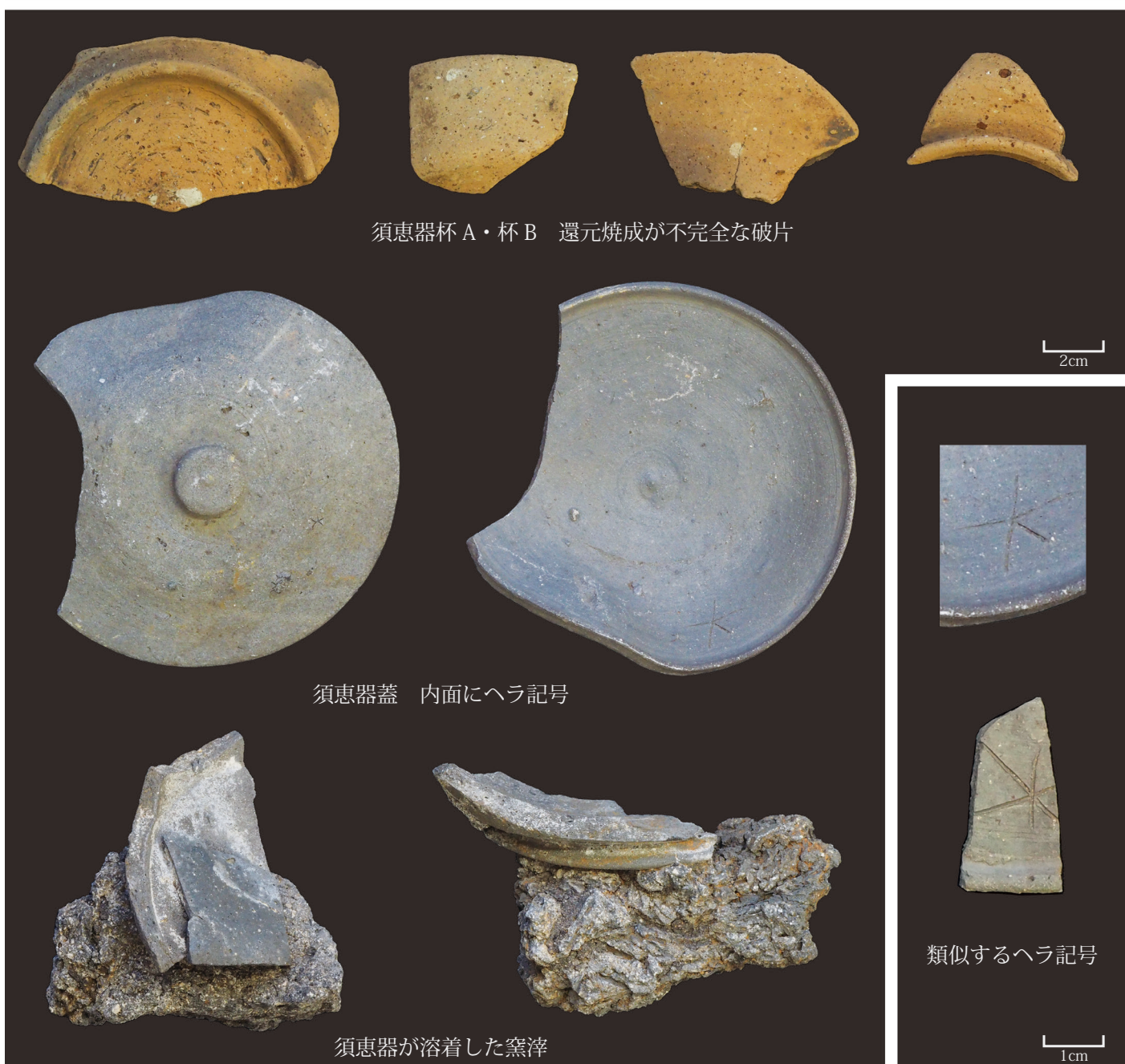




須恵器甕 口縁部

同左 側面

3cm



須恵器杯 A・杯 B 還元焼成が不完全な破片

須恵器蓋 内面にヘラ記号

2cm

須恵器が溶着した窯滓

類似するヘラ記号

1cm

X次 出土遺物 (3)



X次 丘陵部 調査前



X次 丘陵部 草刈り後 (1)



X次 丘陵部 草刈り後 (2)



X次 丘陵部 石垣 3



X次 丘陵部 石垣 4



X次 丘陵部 石垣 8 (1)



X次 丘陵部 石垣 8 (2)



X次 丘陵部 石垣 1



XI次 調査区遠景



XI次 調査区全景



XI次 第1号炭焼窯 完掘状況



XI次 第2号炭焼窯 炭化物出土状況



XI次 第3号炭焼窯 検出状況



XI次 第3号炭焼窯 完掘状況



XI次 第4号炭焼窯 検出状況



XI次 第4号炭焼窯 完掘状況



XI次 重機掘削



XI次 調査風景



XII次 調査区全景



XII次 土坑配列



XII次 重機掘削



XIII次 トレンチ掘削



XIII次 調査区全景



XIII次 調査風景

長野県松本市 中山古墳群・鍬形原遺跡・不動沢古窯址 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし なかやまこふんぐん・くわがたはらいせき・ふどうざわこようし							
書名	長野県松本市 中山古墳群・鍬形原遺跡・不動沢古窯址							
副書名	中山霊園拡張に伴う第X～XIII次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.180							
編著者名	直井雅尚							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2005(平成17)年3月25日 (平成16年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なかやまこふんぐん 中山古墳群	なかやま 松本市中山 4905番外	20202	419	36度 11分 38秒	137度 59分 33秒	X：19990427 ～20000121 20000601 ～20000717	7,180㎡	市営霊園拡張
くわがたはらいせき 鍬形原遺跡			372	36度 11分 38秒	137度 59分 33秒	XI：20010927 ～20011207 XII：20010728 ～20010828	955㎡ 190㎡	
ふどうざわこようし 不動沢古窯址			497	36度 11分 38秒	137度 59分 33秒	XIII：20020731 ～20021030	254㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中山古墳群	古墳	古墳後期	なし					
鍬形原遺跡	集落址 生産址	縄紋			縄紋土器片、石器剥片		炭焼窯4基を調査	
		古墳			土師器片			
		奈良～平安	炭焼窯		窯壁、炭化物			
		近世～近代	溝状遺構、畦状遺構					
	不明	土坑						
不動沢古窯址	窯址	奈良	須恵器窯、灰原		須恵器、窯壁		8世紀の須恵器窯と灰原を調査	
要約	平成2年度から13年度にかけて13次にわたって行われた、中山古墳群、鍬形原遺跡、不動沢古窯址および鍬形原岩址の発掘調査のうち、平成11年度から13年度までのX～XIII次調査の報告書。鍬形原遺跡と不動沢古窯址を扱っている。古代に属するとみられる炭焼窯4基、新発見の須恵器窯1基を調査した。須恵器窯に伴う灰原からは須恵器や窯滓などが多量に出土した。							

松本市文化財調査報告 No.180
長野県松本市
中山古墳群・鍬形原遺跡・不動沢古窯址
—中山霊園拡張に伴う第X～XIII次発掘調査報告書—

発行日 平成17年3月25日
発行 松本市教育委員会
〒390-8620 松本市丸の内3番7号
印刷 精美堂印刷株式会社
